平成23年(2011)　8月1日

No.34

げんきカエル

こども病院ニュースレター

就任のご挨拶

管理局長　秋吉　秀剛

平成２３年４月１日付けで前田　大前管理局長の後任として、兵庫県立こども病院管理局長に着任をいたしました。どうぞよろしくお願いいたします。また、このたびの東日本大震災により被害を受けられた皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

昭和４５年、全国に先駆けて高度先進医療を提供するこどもの専門病院として設立され、県内はもとより全国の患者・家族の皆様から大きな信頼を得てきた当院で仕事をさせていただくことになり、身の引きしまる思いがいたします。また、少産少子化が進む一方で、産婦人科医師や小児科医師の不足が社会的に大きな問題となるなか、当院への期待と役割がこれまで以上に高まってきていることを日々実感しています。

皆様ご案内の通り、病院は様々な職種の多くの職員が仕事をする大きな組織です。

このような組織が十分にその役割を果たすためには、職員同士が職種の壁を越え、こども病院チームの一員として情報を共有し、円滑なコミュニケーションのもと力を合わせて取り組んでいくことが欠かせません。管理局長として、そのための環境づくりに全力を挙げていきたいと考えています。

また、当院は開院以来４１年が経過し、「周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になってこどもたちの健やかな成長を目指す」という基本理念を達成するうえで、施設・設備やマンパワーの面で様々な課題が顕在化してきています。

このため、病院の建て替え整備に向けた構想、計画づくりがいよいよ具体化しつつあります。新しいこども病院が、こども達に夢と希望を与える素晴らしい病院となるよう、患者・家族の皆様の様々な要望を受け止め、職員一人ひとりが意見を出し合い、立替え整備に積極的に参画できる体制づくりにも力を尽くしていきたいと思います。

丸尾院長のもと、未来を見据えたこども病院の新たな発展に向け、職員一丸となって取り組んで参りたいと思いますので、今後とも、皆様のご指導ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

東日本大震災の支援活動に参加して

小児科専攻医　　水田　麻雄

今回私は県立病院の災害救護チーム第5班の一員として宮城県石巻市に赴き、支援活動を行いました。内容は主に避難所である鹿妻小学校での医療活動と、近隣の他避難所への往診です。避難者は約1000人、全ての物資は配給制で、非常に厳しい生活を余儀なくされていました。診察は慢性疾患や上気道症状などが主であり、医学的な面での困難さはそう多くはありませんでしたが、情報伝達という点において、若干混乱が生じていました。まず出発前から被災地における事前情報が不足しており、現場到着後迅速な医療展開が困難でした。また同一避難所内でも、他の医療チームと情報を共有化できず、適切な連携をとることが困難でした。そして何より、集約化された情報をうまく伝達できていないばかりに、後発チームも再度同様の経過をとるという事態になっていたように思います。

今回の活動を通じて、刻々と変わる情報の収集、整理、伝達は非常に大切であると今まで以上に強く感じましたが、そういった時間的・環境的制約のある中で、ある一定の医療活動が行えたことは非常に有意義であり、今後の診療に生かせる様な貴重な経験になったと思います。

救急病棟　看護師　　松末　昌士

3月末に石巻市鹿妻小学校で行われている救護活動に小児医療対応として参加しました。活動は小学校内の保健室で受診される被災者への対応、校内での被災者の健康状態の把握でした。物資やシステムが整っていなかったため決して十分な医療を提供できたとは言えない活動でしたが、地元の診療所も被災しており診察を受診できる環境がないため、救護所では「居てもらえるだけで安心する」など感謝の声を多々いただきました。地元医療システムの復旧の目途が経っていない今、今後も今回の経験を活かし医療支援に関わっていこうと思います。

当時の鹿妻小学校の非難状況

救護活動に参加していた方々

精神神経科の紹介

精神神経科　　関口　典子

「精神神経科」というのは、どういう子どもが来るところなのでしょうか？よくあるケースを見てみましょう。

初診の問診票には「いつも頭がすごく痛い」とだけ書いてある。小さい時からの話を聞いていく。幼少期はとても活発で誰にでも話しかけ人なつこい子であった。しかし、目を離すとすぐに迷子になり、自分の思いどおりにならないといつまでも泣き喚くなどがあり、育てにくい子であると感じていた。勉強はやや苦手で、授業中はいつも落ち着きがなかった。友達に冗談でからかわれると本気でけんかをするため、休み時間も一人で過ごすことが多くなってきた。登校時に腹痛や頭痛を訴えることが多くなったが、小児科に行っても大丈夫と言われた。徐々に学校を休みがちとなった。頭痛の訴えはなかなか治まらず、時に泣き叫び、手がつけられない状態であった。毎日、泣き叫ぶため、母も疲れた表情で「もう、どうしていのかわかりません」と訴えた。

A君は、小さいときから少し育てにくい子で、落ち着きがない、他児と上手く交流できず、冗談が通じないなどがあります。これらは、いくつかの発達の問題やコミュニケーションの問題を示唆しています。現在は頭痛を訴え不登校となっており、学校生活で何らかのストレスがあったと思われます。このように、発達の問題を抱えている子どもが徐々に学校で不適応を起こすケースがしばしば見られます。

また、発達の問題を持たず、はっきりしたストレスや原因もないのに、身体的な不調を訴えたり、「汚れが気になって何度も手をあらってしまう」など同じことを繰り返したり、他人の視線が気になるといったことを訴えたりすることも、児童思春期年代には珍しいことではありません。

精神神経科では、こういった心理的問題や精神症状を抱えた子どもを診ています。必要に応じて心理療法や心理検査を担当する心理士、福祉相談や地域との連携を行う精神保健福祉士などと連携をとり治療を行っています。

開設！糖尿病看護相談外来

看護部　泊　菊子

当院では、昨年12月に糖尿病看護相談外来を開設しました。

糖尿病のお子様とご家族が、いきいきと生活できるように、成長発達や生活全般に関しての支援を目的としています。内容は、子ども達とご家族の生活上の問題解決支援や精神的支援。子ども達へ病態や注射手技を模型でわかりやすくプリパレーションし、セルフケア習得への援助や、学校との調整、ご家族へのグルカゴン注射の演習も行っています。

自身の病気に積極的に取り組もうとするひたむきさ、子どものために懸命なご家族の姿を間近にし、私たち外来看護師は、看護実践の責務を果たす喜びを感じています。

また、成長発達にともなうさまざまな、不安や悩みに対するサポートを、医師、栄養士とカンファレンスをもちチームで取り組んでいます。

Concept　コンセプト

基本理念

周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になってこどもたちの健やかな成長を目指します。

基本方針

1.患者の権利を尊重した医療の実践
2.安全・安心と信頼の医療の遂行
3.高度に専門化されたチーム医療の推進
4.地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
5.親とこどもが一体となった治療の推進
6.こどもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
7.医療ボランティアとの協調による患者サービスの向上
8.継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化

編集後記

この「けんきカエル」が発行される頃は、夏真っ盛りでしょうね。まずは、夏本番に向けて少しでも節電できるよう、初年ぶりに羽根付き扇風機をだしました。涼のない扇風機が流行っていますが、我が家の羽根付き扇風機はまだまだ現役です。

東日本大震災で被災された方々の1日も早い復興を祈りつつ、今日分達にできることは何かを考え、行動に移していく事が大切と感じる今日この頃です。

編集委員長：橋本ひとみ
編集委員：田中亮二郎　橋垣美香子　竹井　朋子　松本　華子　服部　真巳　赤松　規子　長尾　洋

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで

兵庫県立こども病院
周産期医療センター　小児救急医療センター
〒654-0081　神戸市須磨区高倉台1丁目1-1
TEL 078-732-6961
FAX 078-735-0910（総務課）
FAX 078-732-6980（予約センター）
URL:http://www.hyogo-kodomo-hosp.com/
E-MAIL:info_kch@hp.pref.hyogo.jp

23㈱㊐2-015A4